

年間第 5 主日・C 年 (16. 2. 7)

「わたしがここにおりますお遣わしてください」

イザヤの召命

早速、今日の第 1 朗読ですが、預言者イザヤの召命を、感動的に報告しております。実は、イザヤが活躍したのは、イスラエル王国が、三代目の王ソロモンの死後、紀元前 931 年頃ですが北と南とに分裂し、北のイスラエル王国と南のユダ王国に分断されてしまいました。イザヤは、そのユダ王国で、まさにその激動と危機を孕んだ転換期に活躍した偉大な預言者と言えましょう。

では、彼の預言者としての召命を受ける場面を、少し丁寧にたどってみましょう。

「わたしは、高く天にある御坐に主が座しておられるのを見た。衣の裾は神殿いっばいに広がっていた。上の方にはセラフィムがいた。彼らは互いに呼び交わし、唱えた。

『聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う。』

イザヤが、この主の幻を目撃したのは、ユダ王国のまさに深刻な転換期であり、恐らく彼自身も自分の生き方に確信がもてず、不安な時であったようです。政治情勢が安定しないため、社会全体がきわめて不安定な時に、なんといとも荘厳な神の幻を自分の目で確かめることが出来たのであります。ですから、彼のとっさの反応は、自分と社会全体の罪深さにはほかなりせん。そこで、彼は悲痛な叫び声を上げます。ここの、最初のくだりは、別な訳（新改訳）では、次のようになっております。

「ああ。私は、もうだめだ。」

この「ああ」ですが、まさに無限の情感のこもった悲しみと絶望を表わし、本来死者を葬るときの深い嘆きの声であります。

また、ここで言われている「わたしは滅ぼされる。」は、自分自身が崩れてしまい、まさに内側からのまったき崩壊を表しております。

さらに、「わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。」ですが、古代人にとって、唇こそ、全存在を表しているので、「ああ、わたしは全く内側から崩れている。わたしの全存在が汚れ、全存在が汚れている民の中にいる」という意味になります。まさに、イザヤはそのとき、今日の我々以上にさらなる不安と死と絶望を体験していたのではないですか。

ところが、そのイザヤの罪が赦されるのです。

「するとセラフィムのひとりが、わたしのところに飛んで来た。その手には、祭壇から火鉢で取った炭火があった。彼はわたしの口に火を触れさせて言った。『見よ、これがあなたの唇に触れたので

あなたの咎^{とが}が取り去られ、罪は許された。』

そのとき、わたしは主の御声^{みこえ}を聞いた。

『誰を遣わすべきか。誰が我々に代わって行くだろうか。』

わたしは言った。

『わたしがここにおります。わたしを遣わしてください。』

この「わたしがここにおります。」というまさにイザヤの信仰告白ですが、内側からの崩れを体験した者が、神によって根底から支えられていると実感したからにほかなりません。それは、罪の赦しを心の底でしっかりと聞き取った者のまさに感謝に満ちた宣言と言えましょう。

しかも、「ここにおります。」の「ここ」とは、罪からの救いという恵みの場にほかなりません。

ですから、イザヤが立っているところは、激動と不安といら立ちの只中ではなく、自分の内側からの崩れが、いとも聖なる絶対者である神の恵みの御手^{みて}の中にあるという実感ではないでしょうか。

ですから、「わたしを遣わしてください。」と、最も適切な応答が出来たと言えましょう。

すべてを捨ててイエスに従った

次に、今日の福音ですが、ルカが伝える最初の弟子ペトロとヤコブとヨハネのこれまた召命の場面であります。

念のため、他の福音の並行箇所をしらべてみますと、最初の弟子たちの召命には、魚の大漁の奇跡は含まれておりません。ルカは、おそらく原始教会の復活信仰に基づいて、復活によってイエスがすべてを治める主になられたことを、この奇跡によって確認するという意図があったのではないのでしょうか。

ですから、イエスのおことばに、ただひたすら従っただけで、思いがけない大漁を体験できたことによって、ペトロは即座にイエスの足元にひれ伏し、次のような信仰告白をしたのであります。

「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者^{つみぶか}なのです」と。

つまり、イエスを「主」であると信じたからにほかなりません。勿論、その段階で、ペトロが急に復活信仰をもったということではなく、あくまでもその方向付けにおいてと言

うことに過ぎません。

とにかく、イエスから「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」との有り難いおことばをひたすら信じて「すべてを捨ててイエスに従う」ことができたのではないのでしょうか。

実は、イエスは別の場面で、すべての人に向かって次ぎのような召命のおことばをくださいました。

「わたしについて来ようとする者は、おのれを捨てて日ごとおのが十字架を負い、それからわたしに従え。」(ルカ 9. 23 前田訳)

ちなみに、マタイは、最初の弟子たちの召命の場面を次のように描いております。「イエスは、『わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう。』と言われた。二人はすぐに網を捨てて従った。そこから進んで、別の二人の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父親のゼベダイと一緒に、船の中で網の手入れをしているのをご覧になると、彼らをお呼びになった。この二人もすぐに、船と父親とを残してイエスに従った。」(マタイ 4. 19-22)

恐らく、物や、人間関係から離れるのはさほど難しくないのかも知れません。けれども、自我を捨てるのは、まさに至難しなんの業ではないですか。

なぜなら、人間は本来的にどこまでも、自我を通そうとする本能に縛られているからです。とにかく、イエスに従うために、財産や人間関係を捨てる以上に、生涯かけて自我を捨てる訓練を続けなければ、結局、信仰が、偶像崇拜的な自己主張に成り下がってしまう危険がつきまとうのではないのでしょうか。ですから、イエスご自身、この自我を捨てる模範を残されたのです。昔から次のような賛美歌が伝えられています。

「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執こしつしようとは思わず、かえって自分を無にして、僕しもべの身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。」(フィリピ 2. 6-8) 今週もまた、主に倣って日々自我を捨てることを学べるよう共に祈りましょう。